

張華「輕薄篇」試論

宋 略

はじめに

張華（二三―三〇二）は、陸機・左思ら西晋文学の主役を見いだした伯楽であると同時に、彼自身も文学史上に一席を占めている。既に林田愼之助・向嶋成美・佐竹保子諸氏¹が詩賦をはじめとする張華の多様なジャンルについて掘り下げ、微賤の出から司空へと立身出世した彼の人生と文学の関係を明らかにしている。

先学の論考をふまえて注目されるのは、張華の手になる新作の樂府題である。現存する張華の雜曲歌辞のうち、「遊獵篇」「遊俠篇」「輕薄篇」「壯士篇」の四首が張華の創造に始まると林田氏は指摘している²。氏はまた張華の樂府の特徴を「遊俠壯士の世界に題材を求め、雜曲歌辞にあらたな領域を開拓している」と評する。張華の文学史上における意義を端的に示しているのが新たな題材を表現した新作の樂府題なのである。

もとより張華は既存の詩賦の表現世界と全く無関係の題材を探しだして詩に仕立てたわけではない。彼の代表作の「情詩」が、建安詩人達の「情詩」の後継作でありつつも、建安詩風の古朴が取り払われて修辭的に洗練されているように、張華は先行する表現様式の精緻化に長けていた。そのようなスタイルは新作樂府題にも看取されるが、その委細を「輕薄篇」に焦点を絞って跡づけることが本稿の目的である。

一、題名と象徴

まず「遊獵篇」「遊俠篇」など、「ゝ篇」の定義を確認しておく。「ゝ篇」は、楽曲の一種である行⁴に合わせて作成された歌辞である。曹植の「白馬篇」「名都篇」が現存最古の作であり、曹植以後には西晋の傅玄（二一七～二七八）・張華の作が初期のものに含まれる⁵。以下「ゝ篇」を篇題と総称する。

張華の新作篇題の表現を分析するに先立ち、本節では題名について考えたい。張華の題名の付け方が曹植・傅玄のそれと異なる特徴を持つからである。曹植・傅玄の篇題のタイトルがほぼ全て首句の上二字と一致しているのは、左の数首に徴証される。本文引用は『樂府詩集』による。

曹植	「白馬篇」	「白馬飾金鞮」	「名都篇」	「名都多妖女」	「美女篇」	「美女妖且閑」
傅玄	「苦相篇」	「苦相身為女」	「三光篇」	「三光垂象表」	「美女篇」	「美女一何麗」

曹植の樂府篇題は計二十首残っているが、『藝文類聚』に取られた節略文のみ伝わる「飛龍篇」を除き、全てが首句の上二字を題名とする。傅玄の篇題も現存二十二首中、十三首が首句の上二字を題名に冠している。これは西晋までの樂府題に共通して見える傾向であり、篇題ではない樂府題であっても、例えば曹丕の「善哉行」三首はそれぞれ首句の二字を採って「朝日」「上山」「朝遊」との題が付されている（『宋書』卷二十一・樂三）。

歌辞作成後に首句の二字が題にされたのか、首句の二字に作者が想到してから歌辞が作成されたのか、それとも後人によって便宜的に付けられた題であるのかは判然としない。いずれにせよ、篇題の題名は本文の要約や象徴としての機能が付与されていない。それに対して張華の新作篇題と首句の関係を見れば（本文は『樂府詩集』による）、

「遊獵篇」歳莫凝霜結 「遊俠篇」翩翩四公子 「壯士篇」天地相震蕩 「輕薄篇」末世多輕薄

「遊獵篇」「遊俠篇」「壯士篇」は首句の上二字を篇題としておらず、「輕薄篇」だけが首句の末二字を題名に冠する。曹植・傅玄と張華の篇題の題名の相違からして、張華自身が題名選定に趣向を凝らしていることが想像される。壯麗な狩獵を描いた「遊獵篇」(『樂府詩集』卷六十七)を例に吟味する。

興徒既整飭	容服麗且妍	興徒	既に整飭して、容服	麗且つ妍なり
武騎列重圍	前驅抗修旃	武騎	重圍を列ね、前驅	修旃 <small>しゅうせん</small> を抗 <small>あ</small> ぐ
倏忽似回飈	絡繹若浮煙	倏忽	として回飈に似たり、絡繹 <small>ちやくえき</small> として浮煙の若し	
鼓譟山淵動	衝塵雲霧連	鼓譟 <small>さわ</small>	ぎて山淵動き、塵を衝きて雲霧連ぬ	

派手に着飾った車の従者(「興徒」)、獲物を囲い込むための陣を敷く騎馬隊(「武騎」)、旗を掲げる先駆け(「前驅」)は旋風のごとく動き、たなびく靄のようにうち続く陣容が山野にどよめきつつ展開する。続く狩りの場面でもその規模の大きさが表現される。

由基控繁弱	公差操黃間	由基	繁弱を控 <small>ひ</small> き、公差	黃間を操る
機發応弦倒	一縱連双肩	機發	して弦に應じて倒れ、一たび縱 <small>はな</small> ちて双を連ねて肩 <small>にな</small> はる。	
僵禽正狼藉	落羽何翩翻	僵禽	正に狼藉たり、落羽	何ぞ翩翻たる
積獲被山阜	流血丹中原	積獲	山阜を被い、流血	中原を丹 <small>あか</small> くす

弓と弩の名人(養由基と庾公差)もかくやと思われる射手の腕前は、弦が鳴れば必ず命中し、一本の矢で二羽を射貫き、数え切れない獲物から流れる血潮は中原を赤く濡らすほどだと言う。詩は次いで豪奢な夜宴を描き、最後に

狩の主人が人生の有限をはかなみ、狩猟に淫することへの自戒で結ばれる。

既に劉文忠氏が指摘しているように、「遊獵篇」に描かれる大規模な狩猟の叙述の型は、司馬相如の「上林賦」、揚雄の「羽獵賦」「長楊賦」などの大賦をふまえている⁷⁾。更に用語のレベルで「遊獵篇」と賦の影響関係を指摘すれば、車の従者を意味する「輿徒」は張衡「東京賦」(『文選』卷二)の上林苑での御狩に「馬足未だ極れず／輿徒、勞せず(馬足未極／輿徒、不勞)」と見え、弩の名器の「黃間」もやはり張衡の「南都賦」(同卷四)における南陽豪族の狩猟の場面に「駃騠、鑣を斉しうし／黃間、機張る(駃騠、齊鑣／黃間、機張)」の先例を検出できる。帝都の賦およびその延長線上にある「南都賦」は、いずれも都会を中心とする帝国の世界像を描き込んでおり、その点景の一つに皇帝や豪族の大規模な狩猟があった。つまり漢賦の世界に定着している狩猟の表現様式を、張華は詩に移し替えているのである。

この六十四句に及ぶ張華の長編樂府が、首句の「歲莫凝霜結」から二字を取った「歲莫篇」でなく、本文中に見えない「遊獵」を冠することは示唆的である。『史記』卷百十七・司馬相如列伝に司馬相如が「子虛賦」「上林賦」を献じるにあたって「天子遊獵の賦を為るを請う(請為天子遊獵賦)」と述べているように、狩猟を題材とする賦群の総称として遊獵が用いられている。わずか二字に過ぎない「遊獵」は、同時代の読者にとって壮麗な狩猟の情景が喚起される熟語だったと考えられる。すなわち「子虛賦」「上林賦」以降の賦群に培われた輿行きのあるイメージを背負っていればこそ、「遊獵」は狩猟団の偉容、迫力溢れる狩猟、豪華な夜宴などで構成される張華の詩全体を要約し、作品のテーマを象徴する題名たり得たのである⁸⁾。

「遊獵篇」について「壯士篇」「遊俠篇」についても同様の事が指摘できる。「壯士」の語は、「風蕭蕭として易水寒し／壯士一たび去りて復た還らず(風蕭蕭兮易水寒／壯士一去兮不復還)」と詠じて秦に赴いた荊軻を想起させるし(『史記』卷八十六・刺客列伝)、建安詩に目を転じれば劉楨の「五官中郎將に贈る」其三(『文選』卷二十三)における曹丕の出陣を悲しむ場面で「壯士遠く出征す／戎事將た独り難からん(壯士遠出征／戎事將独難)」と、曹丕が壯士と呼ばれている例を見いだせる。「遊俠」についても、『史記』に戦国四公子を筆頭とする遊俠列伝が立てら

れているように、張華以前に既に特定の間人類型を指す語として定着しており、例えば曹植の「白馬篇」で作中の主人公は「幽并の遊俠兒なり（幽并遊俠兒）」と語られている。「壯士」も「遊俠」も、言葉の背後に豊かな文化的イメージが控えているのである。

以上のように張華の新作篇題は、西晋期の士大夫に共有される文化的通念を基盤にして、読者が題名を見ただけで輪郭の鮮明なイメージを想像できるように仕込まれているが、その題名の付け方は、抽象的な思考を展開する馮衍の「顯志賦」、張衡の「思玄賦」、建安詩人が共作した「情詩」や「七哀詩」のように、題名が本文の主題を徴表する賦・徒詩の手法に倣ったものと考えられる。篇題の選定自体に、張華の一風変わった工夫をうかがい知れるのである。

しかしながら都会の輕薄な少年が物語られる「輕薄篇」は、張華の新作篇題の他の三首とも趣を異にする。表現様式の直接の範型となる先行作品をたやすく探し出せる遊獵・壯士・遊俠に比べ、輕薄はそれらしき著名なテクストを前代に見いだしにくいためである。文学的伝統が比較的浅い題材を、張華はいかに樂府の美感に落とし込んでいるのか、その方法を検討してゆきたい。

二、「輕薄篇」におけるモチーフの精緻化

「輕薄」の二字に拘らず、都会の少年が主役に据えられている樂府を探すならば、漢代の「長安有狹斜行」が見いだされる。この樂府は、長安の小道で偶然行き合った少年同士の会話に始まり、長安市街でも目立つ豪邸に住む一少年の兄弟の身分の高さ、兄弟の配偶者を讃える構成を持つ⁹。共通する表現が「相逢行」にも見えることから、都会の裕福な少年というモチーフが漢代樂府に形成されていたと言われている¹⁰。

「輕薄篇」はその系譜に位置づけられ得るのだが、しかし単に漢代樂府のモチーフと表現を二番煎じのごとく再生産することに終始してはいまい。それを端的に裏付けているのが「輕薄篇」以前の樂府題との辺幅の差である。

「長安有狹斜行」22句 「相逢行」30句 「名都篇」28句 「輕薄篇」60句

漢魏の類題作が二十―三十句に収まっていたのに対し、「輕薄篇」は一挙に六十句に倍增している。句数の顕著な長大化という外形的条件だけを見ても、詩に語られる内容に変化のあることが容易に想像される。本稿冒頭で既に述べた通り、前代と異なる張華詩の特徴は修辭性にあるが、「輕薄篇」において少年の歡樂の諸相は対偶・典故のもとに象嵌されている。そのことに注意して「輕薄篇」を分析する。

1 末世多輕薄	驕代好浮華	末世	輕薄多し、驕代	浮華を好む
3 志意既放逸	貲財亦豐奢	志意既	に放逸にして、貲財亦た	豐奢なり
5 被服極纖麗	肴膳尽柔嘉	被服	纖麗を極め、肴膳	柔嘉を尽くす
7 童僕余梁肉	婢妾蹈綾羅	童僕	梁肉を余し、婢妾	綾羅を蹈む
9 文軒樹羽蓋	乘馬鳴玉珂	文軒	に羽蓋を樹て、乘馬は	玉珂を鳴らす
〔中略〕				
17 朝与金張期	暮宿許史家	朝に金・張と期し、暮に許・史の家に宿る		

第一聯には頹廢的な世相と絡めて輕薄な少年が紹介されている。輕薄子は華麗な衣服を身にまとい、美食を楽しみ、そのおこぼれに従僕も預かるほどであり、立派な車と馬をのりまわし、貴顯との交遊に明け暮れる。金・張・許・史の四姓は前漢の宣帝期に威勢を誇った寵臣と外戚の金日磾・張安世・許伯・史高¹¹を指し、帝都の豪強を意味する。少年の衣食・交通・交遊に関するこの叙述には「長安有狹斜行」や、張華に先だって都會の少年の享樂をうたった曹植の「名都篇」と共通するモチーフが見て取れるのだが、モチーフを基盤にして描かれた内容には相違がある。

「長安有狹斜行」では兄弟夫妻の紹介を通じて一族の富貴が語られ、「名都篇」では鬬鷄・狩獵といった遊興の叙述に全二十八句中十二句が費やされている。対して「輕薄篇」では少年の出で立ちと交遊に重点が置かれ、華美な雰囲気強調されている。このような少年の造型に相応の、贅を尽くした遊宴が続いて活写される。

- 19 甲第面長街 朱門赫嵯峨 甲第 長街に面し、朱門赫かくとして嵯峨たり
- 21 蒼梧竹葉清 宜城九醞醑 蒼梧の竹葉清、宜城の九醞うん醑き
- 23 浮醪隨觴轉 素蟻自跳波 浮醪觴さかすきに随いて轉じ、素蟻自ずから波に跳ぶ

長い通りに面し、輝く朱門がそびえ立つ邸宅での宴飲を描く場面の視点は酒に定められている。蒼梧産の竹葉酒、宜城産の九醞醑が盃に盛られ、酒粕（浮醪）や蟻の形を彷彿させる泡（素蟻）が波立つ。細やかな酒の描写によって参会者が酌み交わす動的情景が詩に浮かび上がってくるのだが、この19～24の表現は、先行する文章表現を素材に取り込んで作られたものである。美酒に酔って歡樂を尽くす宴を描いた曹植の「酒賦」（『藝文類聚』卷七十二・酒）を抜粹する。

有宜城醪醑、蒼梧縹清。或秋藏冬發、或春醞夏成。或雲弘潮涌、或素蟻浮萍。

宜城の醪醑、蒼梧の縹清有り。或いは秋に藏し冬に發り、或いは春に醞かもし夏に成る。或いは雲弘潮涌き、或いは素蟻浮萍のごとし。

「酒賦」に酒の具体名として言及されるのは右の「宜城」と「蒼梧」のみであるが、それらは銘酒の産地として名が通っていたと思われる。宜城・蒼梧の銘酒が醸造される過程と、醸造完了後の様態が描写されている右の引用箇

所の、傍線部「素蟻浮萍」が「輕薄篇」の「素蟻自跳波」の源泉であることは明らかである。興味深いことに、酒泡「蟻の見立ては張華以前の文人の手による五言詩（徒詩・樂府を問わず）に見えず、対して張華作では「輕薄篇」だけでなく「遊獵篇」の夜宴にも用いられている¹²。宴の場面を形作る細部を、張華は既に成熟した表現様式を持つ他ジャンルから切り出しているのである。賦に取材したきらびやかな修辭は、酒に次ぐ美女の舞樂のシーンを印象的に織りなすのにも役立てられている。

- | | | |
|----------|-------|--|
| 27 一顧傾城国 | 千金寧足多 | 一顧して城国を傾け、千金寧んぞ多しとするに足らん |
| 29 北里献奇舞 | 大陵奏名歌 | 北里 奇舞を献じ、大陵 名歌を奏す |
| 31 新声踰激楚 | 妙妓絶陽阿 | 新声 激楚に踰え、妙妓 陽阿に絶す |
| 33 玄鶴降浮雲 | 鰾魚躍中河 | 玄鶴 浮雲より降り、鰾魚 <small>しんぎょ</small> 中河に躍る |

美女の舞う様子を描いた27・34には、すべての句に典故が仕込まれている。27は李延年の「歌詩」〔『玉臺新詠』卷一〕の「一たび顧みれば人の城を傾け／再び顧みれば人の国を傾く（一顧傾人城／再顧傾人国）」に基づく。「北里」は紂王が妲己を喜ばせるために作ったという舞曲名だが、ここでは北の街を指す。「大陵」は趙の敬侯が夢に琴を談じ唱歌する処女を見た場所（『史記』卷四十三・趙世家）。「激楚」は「招魂」に、「陽阿」は「対楚王問」に由来する曲名であり、31・32は今の場で披露されている舞樂が名曲を超える、というニュアンスで美妙なイメージを点綴する。「玄鶴」は琴の名人・師曠の演奏で玄鶴が集ったという『韓非子』十過の故事、「鰾魚」は瑟の名人である瓠巴の演奏で鰾魚が躍り出る『淮南子』説山訓の故事に基づく¹³。このくだりには、典故をただ羅列するのではなく、動詞を交えて舞樂の躍動感を演出する作者の工夫が認められるのだが、そのような表現の練達ぶりにも依拠する型が存在していた。後漢末の辺讓の「章華賦」（『後漢書』卷八十下・文苑列伝・辺讓）を抜粋する。

揚激楚之清宮兮、展新聲而長歌。繁手超於北里、妙舞麗於陽阿。

激楚の清宮を揚げ、新聲を展べて長歌す。繁手は北里を超え、妙舞は陽阿より麗し。

楚の靈王が建てた章華台にて催された宴で、神女の宓妃・湘娥らが舞樂を演じる一局面に、「激楚」「新聲」「北里」「陽阿」が見える。「輕薄篇」と共通する樂曲が集中的に表れている好例だが、張華が「章華賦」を参考にしたというよりは、漢魏の賦に描写される宴の場面に上記の樂曲が頻出すると見るべきであろう。先に見た酒と同じく、「輕薄篇」の舞樂の典故も賦の常套に由来している。33 34の「玄鶴」「鰾魚」も、張華が直接『淮南子』から実験的に取り込んだ故事ではなく、馬融の「長笛賦」(『文選』卷十八)の一節「鰾魚は水裔に喁し／駟馬を仰がしめ玄鶴を舞わしむ(鰾魚喁於水裔／仰駟馬而舞玄鶴)」を承けたものである。

つとに向嶋成美氏は、張華詩の修辭性の特徴の一つに、効果的に配置された典故を数えている¹⁴。宴会の場面を形作る典故は、先行する漢魏の美文、とりわけ賦に用いられていた。後漢中期の馬融・後漢末の辺讓・魏の曹植という、世代に隔たりのある三者の賦を見るだけでも、漢魏の賦の世界では、酒・舞樂に関連する表現に一定のまとまりがあったと容易に想像される。これを裏返せば、漢魏・西晋の読者もまたかかる宴会の表現群に慣れ親しんでいたということが類推される。先に見た「輕薄篇」の用典は、張華が彼独自の眼識で史書や思想書から抜き出したというよりも、既に効果が保証されたものを取捨選択して構成していると見なすべきである。そうして「輕薄篇」の同時代の読者は、詩に描かれた宴のイメージをまざまざと思い描くことが可能であつただろう。

「輕薄篇」の宴会の場面は、「長安有狹斜行」以来の類題樂府のモチーフを承けている。しかし先例と共通のモチーフのもとに導出された「輕薄篇」には、決して見過ごせない先例との差異が存在する。すなわち「輕薄篇」には、類題樂府のモチーフという骨格に、他のジャンルから切り出してきた宴会関連の定型表現が肉付けされているのである。民歌風の歌いぶりは、士大夫の文芸たる賦の表現を取り込んで精緻化し、修辭性の濃厚なものに鑄直されたのである。

三、宴の歓喜と悲哀

華やかな宴の雰囲気を描かれた「軽薄篇」は、次の哀切な文言で結ばれている。

- | | | |
|----------|-------|---------------------------------------|
| 51 留連彌信宿 | 此歎難可過 | 留連して信宿に彌り、此の歎過すべきこと難し |
| 53 人生若浮寄 | 年時忽蹉跎 | 人生浮寄の若し、年時忽ちに蹉跎たり |
| 55 促促朝露期 | 栄楽遽幾何 | 促促たる朝露の期、栄楽遽に幾何ぞ |
| 57 念此腸中悲 | 涕下自滂沱 | 此を念じて腸中悲しく、涕下ること自ずから滂沱たり |
| 59 但畏執法吏 | 礼防且切磋 | 但だ法を執るの吏を畏るれば、礼防且つ切磋ならん ¹⁵ |

時は瞬く間に過ぎ去り、栄楽もつかの間のもの。それを思えば腸はむすほおれ、はらはらと涙が流れてしまう。軽薄子の嗟嘆がせり上がってくるが、かかる「軽薄篇」の悲哀は類題楽府よりも前景化されている。例えば曹植の「名都篇」の末尾は「白日 西南に馳せ／光景 攀ずべからず／雲のごとく散じて城邑に還り／清晨 復た来たり還らん（白日西南馳 光景不可攀 雲散還城邑 清晨復来還）」として、歓楽の中断と再開が匂わされても¹⁶、少年達が時間の短促を憐むそぶりは見えない。

言うまでもなく「軽薄篇」の末尾は、「古詩十九首」以来の推移の悲哀の型を汲むものである。多彩な手法で描かれた歓喜と、数句に凝縮された悲哀によって生み出された振幅が、「軽薄篇」の抒情の核を成している。問題は、推移の悲哀が「軽薄篇」に落とし込まれたかたちにある。まずは「古詩十九首」に立ち戻って推移の悲哀に関連する意匠をおさえておきたい。其三を掲げる。

青青陵上柏 磊磊礧中石 青青たり陵上の柏、磊磊たり礧中の石

人生天地間 忽如遠行客
 斗酒相娛樂 聊厚不為薄
 驅車策駑馬 遊戲宛与洛
 洛中何鬱鬱 冠帶自相索
 長衢羅夾巷 王侯多第宅
 両宮遙相望 双闕百余尺
 極宴娛心意 戚戚何所迫

人 天地の間に生くるは、忽として遠行の客の如し
 斗酒もて相い娛樂し、聊か厚しとして薄しと為さず
 車を驅りて駑馬に策ち、宛と洛とに遊戲す
 洛中 何ぞ鬱鬱たる、冠帶 自ら相い索む
 長衢 夾巷を羅ね、王侯 第宅多し
 両宮 遙かに相い望み、双闕 百余尺
 宴を極めて心意を娛しましむるも、戚戚たるは何の迫る所ぞ

須臾たる生を倂んで、都市での享樂に耽る。楽しみを極め尽くしても、なお迫る不安という、語り手の虚無的な心情がうかがわれる。この詩には「輕薄篇」と共通する意匠、酒、貴顕、大邸宅が見えるのだが、それは続く「古詩十九首」其四にも共通している。

今日良宴会 歡樂難具陳
 彈箏奮逸響 新声妙入神
 令德唱高言 識曲聽其真
 齊心同所願 含意俱未申
 人生寄一世 奄忽若飊塵
 何不策高足 先拋要路津
 無為守窮賤 轉軻長苦辛

今日 良宴会、歡樂 具さには陳べ難し
 箏を弾じて逸響を奮い、新声 妙なること神に入る
 令德 高言を唱うなれば、曲を識るもの其の真を聴く
 心を齊しくして願う所を同じくすれば、意を含みて俱に未だ申べず
 人生 一世に寄す、奄忽たること飊塵の若し
 何ぞ高足に策ち、先ず要路の津に拋らざる
 為す無かれ窮賤を守り、轉軻して長く苦辛するを

其四では享樂の主な表象として楽曲が提示されている。繰り返すが、其三と其四の意匠（酒、音楽、貴顕、大邸宅）は、全て「輕薄篇」に踏襲されている。時間の推移に想到してないまざる享樂と悲哀の情は、古詩の段階から、都会における宴の場のイメージと結合していたのである。

このような文学的因襲が建安以前の詩にあったのを勘案すれば、「輕薄篇」では、宴というシーンが基本軸となつて、都会の少年が外側と内側から描写されていると考えられる。すなわち、「長安有斜狭行」や「名都篇」のように、少年の生活の常態としての富貴や享樂に注視するだけでなく、富貴・享樂と表裏する哀情が、輕薄子の内面として、作品に織り込まれているのである。

「輕薄篇」における歡喜と悲哀のコントラストは、華美に流れる宴会から輕薄子の心情表現へと場面が滑らかに移行することによって、その効果が引き立てられている。歡樂から悲哀に移り変わる節目にあたる51 52「留連して信宿に彌り／此の歡過すべきこと難し」は、歡樂に軸足が置かれながらも、歡樂を尽くす時間の不足を暗示し、時の流れそのものを喚起して、人生の定めなさを説く53「人生若浮寄」以降への呼び水となっている。「輕薄篇」を通覧した時、宴会の場面を飾り立てる対句の精巧さに注意が向きがちであるが、場面の切り替えにも張華の筆力を認めることができよう。要するに「輕薄篇」には、陰影深い抒情を生み出す張華の手並みが看取されるのである。

四、あり得べき人間類型としての輕薄子——詩と現実の間——

これまでの分析で「輕薄篇」の表現の構造はいささかなりとも明らかにされたと思う。最終節に入るのに際して「輕薄篇」の全文を掲げる¹⁷。

1 末世多輕薄 驕代好浮華 末世 輕薄多し、驕代 浮華を好む
3 志意既放逸 貲財亦豊奢 志意既に放逸にして、貲財亦た豊奢なり

5 被服極纖麗 肴膳尽柔嘉
 7 童僕余梁肉 婢妾蹈綾羅
 9 文軒樹羽蓋 乘馬鳴玉珂
 11 橫簪刻玳瑁 長鞭錯象牙
 13 足下金鑣履 手中双莫耶
 15 賓從煥絡繹 侍御何芬葩
 17 朝与金張期 暮宿許史家
 19 甲第面長街 朱門赫嵯峨
 21 蒼梧竹葉清 宜城九醞醑
 23 浮醪隨觴轉 素蟻自跳波
 25 美女興齊趙 妍唱出西巴
 27 一顧傾城國 千金寧足多
 29 北里獻奇舞 大陵奏名歌
 31 新声踰激楚 妙妓絕陽阿
 33 玄鶴降浮雲 鰾魚躍中河
 35 墨翟且停車 展季猶咨嗟
 37 淳于前行酒 雍門坐相和
 39 孟公結重關 賓客不得蹉
 41 三雅來何遲 耳熱眼中花
 43 盤案互交錯 坐席咸喧嘩

被服 纖麗を極め、肴膳 柔嘉を尽くす
 童僕 梁肉を余し、婢妾 綾羅を蹈む
 文軒に羽蓋を樹て、乘馬は玉珂を鳴らす
 橫簪 玳瑁を刻み、長鞭 象牙を錯う
 足下 金鑣履、手中 双莫耶
 賓從 煥として絡繹たり、侍御何ぞ芬葩たる
 朝に金・張と期し、暮に許・史の家に宿る
 甲第 長街に面し、朱門赫として嵯峨たり
 蒼梧の竹葉清、宜城の九醞醑
 浮醪觴に随いて轉じ、素蟻自ずから波に跳ぶ
 美女 齊趙に興り、妍唱 西巴に出づ
 一顧して城國を傾け、千金寧んぞ多しとするに足らん
 北里 奇舞を獻じ、大陵 名歌を奏す
 新声 激楚に踰え、妙妓 陽阿に絶す
 玄鶴 浮雲より降り、鰾魚 中河に躍る
 墨翟且つ車を停め、展季猶お咨嗟す
 淳于 前みて酒を行め、雍門 坐して相和す
 孟公 重關を結し、賓客 蹉ることを得ず
 三雅來たるは何ぞ遅きや、耳熱して眼中は花む
 盤案互いに交錯し、坐席咸な喧嘩す

- | | | | |
|----|-------|-------|--------------------------|
| 45 | 簪珥或墮落 | 冠冕皆傾邪 | 簪珥或いは墮落し、冠冕皆な傾邪す |
| 47 | 酣飲終日夜 | 明燈繼朝霞 | 酣飲 日夜を終え、明燈 朝霞に繼ぐ |
| 49 | 絶纓尚不尤 | 安能復顧他 | 絶纓尚お尤めず、安んぞ能く復た他を顧みむや |
| 51 | 留連彌信宿 | 此歎難可過 | 留連して信宿に彌り、此の歎過すべきこと難し |
| 53 | 人生若浮寄 | 年時忽蹉跎 | 人生浮寄の若し、年時忽ちに蹉跎たり |
| 55 | 促促朝露期 | 榮榮遽幾何 | 促促たる朝露の期、榮榮遽に幾何ぞ |
| 57 | 念此腸中悲 | 涕下自滂沱 | 此を念じて腸中悲しく、涕下ること自ずから滂沱たり |
| 59 | 但畏執法吏 | 礼防且切磋 | 但だ法を執るの吏を畏るれば、礼防且つ切磋ならん |

雕琢されたこの楽府の表現意図について少しく触れておきたいが、解釈はおおむね二つに分けられる。一つは西晋期の奢侈的雰囲気に対する諷刺と見るものであり、もう一つは秩序から逸脱した輕薄子の生き方への張華の共感を指摘するものである¹⁸。両説はいずれも本文に根拠を持つ合理的な読みであり、一方が他方を否定する関係にはない。注目すべきは、両説がいずれも「輕薄篇」に明確な作者の意思表明が託されているという前提に立っている点である。諷刺にせよ、諷刺の反措定として打ち出された張華ならではの美意識にせよ、作者の側に訴求せざるを得ない純粹に個人的な思想なり主題なりが「輕薄篇」にあるという認識は両説に共通している。しかし先に分析したごとく、「輕薄篇」は整った賦の表現や、「詠懷」に痕跡を見る輕薄子像の導入など、同時代の文学的因襲に根ざして象徴された修辭性の色濃い作品である。同時代の読者を楽しませる道具立てが「輕薄篇」に仕込まれているのは確実だが、張華自身の思いの有無は判然としない。やはり共同体意識に基づいた情感・認識が楽府に投影されているという森瀬壽三氏の指摘の通り¹⁹、「輕薄篇」もまた集団に共有される抒情が縁取られていると見るべきで、「輕薄篇」と、彼の思想が前面に浮き出ている「鶴鶴賦」を同じ位相に置いて考察することは今しばらく控えたい²⁰。

そのように「輕薄篇」を指定した場合、類題樂府にいう「少年」が「輕薄」という言葉に代替され、主役に据えられたことの経緯が問題として浮上する。漢魏の文献に見える「輕薄」の意味内容を、史書をも射程に据えて検討する必要がある。

『漢語大詞典』は「輕佻浮薄」を第一の語義にしている。輕薄は秩序を乱す行為を含意するように思われてくるが、なお輕薄という言葉に想定される人間像を把握してみたい。馬援が甥に宛てた書簡（『後漢書』卷二十四・馬援列伝）を掲げる。

初め兄の子嚴と敦は並びに譏議を好み、而して輕俠の客に通ず。援前に交趾に在るや、書を還して之を誡めて曰わく、「……龍伯高は敦厚にして周慎、口に詛言無く、謙約にして節儉、廉公にして威有り。吾は之を愛し之を重んず。汝の曹の之に效わんことを願えり。杜季良は豪俠にして義を好み、人の憂いを憂いとし、人の樂しみを樂しみとし、清濁失う所無く、父の喪に客の致すこと、数郡より畢く至る。吾は之を愛し之を重んずるも、汝の曹の之に效わんことを願わざるなり。伯高に效いて得ざれば、猶お謹敕の士と爲る。所謂る鵠を刻んで成らざるも尚お鷺に類する者なり。季良に效いて得ざれば、陷つて天下の輕薄子と爲る。所謂る虎を画いて成らずして反つて狗に類する者なり。……」²¹

馬援の甥である馬嚴・馬敦は好んで他人を批評し、俠客と交わっていた。甥の素行を憂慮した馬援は自らが尊重する龍伯高・杜季良の為人を比較吟味しつつ、豪傑肌の杜季良よりも謹嚴実直な龍伯高を範にせよと甥を戒める。その根拠に、杜季良の義俠心を生半可に真似ると輕薄子に墮してしまう危険があると、傍線部に指摘されている。この書簡には年若い甥の四つの将来像が示されている。龍伯高のごとき廉公の士、廉公までに至らない謹敕の士、杜季良のごとき豪俠、望ましくはないが豪俠くずれの輕薄子である。これに基づけば輕薄は個人の氣質、なかなか

士のかくあるべき氣質の一つとしての豪俠と表裏の関係にある言葉だと判断される。右の書簡に言及される人物は官吏か、官吏予備軍に相当する馬巖・馬敦だけだからである。

輕薄は半端な俠客を指すだけに用いられていた言葉ではない。『後漢書』卷七十七・酷吏列伝・周紆には夏陽侯・寶瓊の放恣ぶりを輕薄と総評した上で左のように述べている。

按ずるに、夏陽侯瓊は本より輕薄に出で、志は邪僻に在り。学は経術無きに、而るに妄みだりに講舍を構え、外は儒徒を招くも、実は姦あつ架を会あつむ²²。

夏陽侯・寶瓊は志よこしまにして學術に半可通でありながらも、学舎を構えて儒者と交わると称して姦佞の徒と会した。男伊達を売り物にする義俠であつても、学問に励む儒者であつても、なまなかに心が正されていなければ、弊害を生み出してしまふのであるから、つまり輕薄の語義の核心は常軌を逸脱して社会に悪果をもたらすところにあると考えられる。後漢末の王符の『潜夫論』卷二・考績七で、德行に疑問符のつく人物が登用される現状を批判する一文に「輕薄で以て敦厚に應じ」²³が見えるのも証左の一つである。

このように見てくれば、「輕薄篇」の放蕩児が輕薄と呼ばれることが納得される。儉約を顧みずに遊興にふける行動様式が輕薄なのである。そうして実は、輕薄子を題材とする詩が阮籍の「詠懷詩」にある。其五（『古詩紀』作品番号）を挙げる。

1 平生少年時	輕薄好絃歌	平生	少年の時、輕薄にして絃歌を好む
3 西遊咸陽中	趙李相經過	西のかた咸陽の中に遊び、趙李相い經過す	
5 娛樂未終極	白日忽蹉跎	娛樂	未だ終極せざるに、白日 忽ち蹉跎たり

- 7 驅馬復來歸 反顧望三河 馬を驅りて復た來たり帰り、反顧して三河を望む
 9 黃金百溢尽 資用常苦多 黃金 百溢尽き、資用 常に苦だ多し
 11 北臨太行道 失路將如何 北のかた太行の道に望む、路を失して將た如何せん

昔、絃歌に熱中していた主人公は、時間と金錢を蕩尽してしまったことを悔い、魏王の邯鄲侵略を季梁が諫めるために語った、楚国を目指してあべこべに太行山に向かう例え話（『戰國策』魏策四）をふまえ、路を失うように転落した現状にくれまどう。

享樂的なかつての「少年」が「輕薄好絃歌」なのだという。「詠懷詩」八十二首には他にも「輕薄」が二例検出され、特に其七十五には「輕薄 一時に在り／安くんぞ百世の名を知らんや（輕薄在一時 安知百世名）」ともあり、死後の名声に意を介さず遊蕩する行為として「輕薄」が定位されている。更に、張華に引き立てられた左思の「詠史八首」其四（『文選』卷二十一）にも、「輕薄」とは銘打たれていないものの、都会の人士の逸樂が左のように描かれている。

- 朝集金張館 朝に金張の館に集い
 暮宿許史廬 暮に許史の廬に宿る
 南鄰擊鐘磬 南鄰は鐘磬を撃ち
 北里吹笙竽 北里は笙竽を吹く

一見して明らかのように、「輕薄篇」の「朝与金張期 暮宿許史家」などと同工異曲である。阮籍・左思の詩作を要するに、放蕩する輕薄少年の造型は、士人社会の現実から発しているものであるために、リアリティに富んでいたと考えられるのである。

阮籍・張華・左思の作の先後や影響については詳らかにし得ず、三者の間に単線的な系譜を想定するよりも、三者の背景に、都会の諸相にまつわる表現の広がりがあったと考えるべきである。この広がりの中には、文献上確認される典型として、「長安有狹斜行」以来の少年の物語や、「古詩十九首」に見える宴会の悲喜哀歓なども含まれている。そういった楽府や徒詩には、享楽に淫する登場人物があった。あるいは一時の遊興に心を解き放ち、彼等は、あるいは虚無感を振り払おうとして酒に溺れ、あるいは財産を蕩尽して後悔に暮れる。——作品群に散在する享楽的な人間像の断片が、魏晋の王朝交替に際し、軽薄という一つの言葉のもとに纏められたのである。ただ、阮籍・左思の詩において、そのような人間像は十分に掘り下げられていたとは言いがたい。例えば「詠懷詩」其五は軽薄子が道を踏み外すことに主眼が置かれ、左思の「詠史」其四でも、軽薄的なイメージは俗人に当てはめられていて、同作の趣旨は逼塞しながらも著作に打ち込む士を讃えることにある。対して張華の「輕薄篇」は、軽薄子そのものを主題化し、六十句にわたって彫り深く形象したところに、作品としての個性が備わっていると言えよう。

さて、士大夫の共同経験に根ざす人間類型という観点によって、今一度「輕薄篇」を眺めれば、社会における軽薄子という意味合いが第一・二聯に示されているのに気づく。

1 末世多輕薄 驕代好浮華 末世 輕薄多し、驕代 浮華を好む
3 志意既放逸 貲財亦豊奢 志意既に放逸にして、貲財亦た豊奢なり

輕薄子は「志意既放逸」とされる。「志意」は、他者に表われ出ている心持ちを指す。例えば、後人の偽作とされる劉歆の「遂初賦」序（『藝文類聚』卷二十七・行旅）の「朝廷大臣の非^{そと}所と為り、出でて吏に補せらるることを求む。後に五原太守に徙るも、志意得ず（為朝廷大臣所非、求出補吏。後徙五原太守、志意不得）」に看取される。この一文で「志意」が官途での劉歆の志を指し、志意を得ないが故の不遇を示しているように、「輕薄篇」の「志意

「既放逸」には、士大夫社会に認知される輕薄子の放縱な態度が含意されているのである。輕薄子の奢侈放蕩はしかし、手放して称賛されるべきものではない。輕薄子が人生の無常を憐んだ後に提示された末聯の「但畏執法吏 礼防且切磋」は、それまでの五十八句に流麗に裝飾された哀歎が描出されているのに対し、うってかわって硬質な趣を持つ。いくつかの語の、詩における先例を見ないためであるが、周辺資料を二三参照しておく。

「但畏執法吏」には歴史的背景がふまえられている。史上に輕薄と呼称される人物は、しばしば法に掛かって処刑されていた。前漢の酷吏である尹賞の伝（『漢書』卷九十）には、部下を率いて「長安中の輕薄少年惡子を雜舉」し、数百人を処刑したとある²⁴。また、循吏の王渙を称えた「雁門太守行」（『樂府詩集』卷三十九）に「輕薄少年を捕え、笞を加え罪を決す（捕輕薄少年 加笞決罪）」とある。したがって「輕薄篇」の主人公が「執法吏」を恐れるのは必然的と言える。

ついで「礼防」の先例には、曹植の「洛神賦」（『文選』卷十九）が見出される。該当箇所を抜粹する。

感交甫之弃言兮、悵猶豫而狐疑。收和顔而静志兮、申礼防以自持。

交甫の弃言に感じ、悵^{ちやう}として猶豫して狐疑す。和顔を収めて志を静め、礼防を申べて以て自ら持す。

神女に強く惹かれる曹植であったが、神女との誓約が反故にされた鄭交甫を想起して気を取り直す。その具体的な行為が志を静め、「禮防」をのべるといふものである。放逸に傾きそうな心に歯止めをかけるのが「禮防」なのである。以上をふまえれば、「輕薄篇」の末聯では、輕薄子が自戒して礼の規範に則ろうとの意志を見せているようにも、あるいは「執法吏」が礼に嚴格であるとも解し得る。どちらに解するにせよ、訓戒的な雰囲気の漂う末聯だと言えるのだが、必ずしも額面通りに訓戒の意を受け止める必然性も存在しない。本節の冒頭で触れたように、社会諷刺と、輕薄子に対する共感という、二通りの読みが可能なのであるが、複数の読解が成り立つという事実は、「輕薄篇」の

構成の妙を逆照射しているように思われる。法に裁かれる予感²⁵は仄めかされても、輕薄子の結末は詩に明言されず、処罰されるとも、反対に悔い改めるとも、主人公の人生の行き先は読者の想像に委ねられている。そうしてこの二つの可能性は、輕薄子の社会における立ち位置を指示している。法に照らされての懲罰は無論のこと、改悔もまた社会規範への尊重と回帰が含意されている。現実にかにもあり得そうな輕薄子の二つの未来が詩の幕引きに設けられ、解釈の自由が生まれることで、「輕薄篇」の余情が醸し出されているのである。

仮構された主役の、社会における立場の視点に寄せた着地は、張華の樂府詩に散見する。「壯士篇」の末聯は「独歩す聖明の世／四海 英雄を称す（独歩聖明世 四海称英雄）」と烈々たる武勲を持つ壯士が世人に讃えられる旨が述べられているし、「遊獵篇」も狩獵に淫することを戒めて「伯陽 我が為に誠む／迹を検めて清軌に投ぜよ（伯陽 為我誠 検迹投清軌）」と結ばれている。このような語りが漢賦の「百を勸めて一を風す」手法を応用していることは贅言を要しまい。重要なのは、「輕薄篇」が集団に供される文芸として整齐たる構成を持ったということである。十人十色の嗜好を持つ読者（士大夫）を華美なイメージで楽しませ、未来への不安に惹起された主役の哀切な抒情に浸らせ、教戒的な幕切れで作品世界の余韻に浸りつつそこから抜け出せるように、「輕薄篇」は綾なされている。輕薄子は、樂府における伝統的な主役たる征夫思婦のごとくリアリティを十全に具備する人間類型として、読者を作品世界にいざなう案内役となっているのである。

「輕薄篇」は文学史に孤立しなかった。南朝に何遜の「擬輕薄篇」、張正見の「輕薄篇」、中唐に李益の「輕薄篇」が成立するのは、張華の「輕薄篇」に模擬され様式化されるに足る価値があると認められたからに他ならない。「輕薄篇」は、少年を主題とする樂府題の一類題として典型化されたのである。本稿では、かかる「輕薄篇」の文学史的価値が、後世の文人の模擬によって突き固められたことを十分に認めつつ、なおも先行する文章表現とモチーフを統合し、輕薄を主題化した張華の手筋にこそ「輕薄篇」の価値の根源を見定めたいと思う。

- 1 林田愼之助「魏晋南朝文学に占める張華の座標」(『中国中世文学評論史』創文社、一九七九年／初出一九六五年)、向嶋成美「張華の詩について」(『東京教育大学文学部紀要』87、一九七二年三月)、佐竹保子「張華」(『西晋文学論』—玄学の影と形似の曙—汲古書院、二〇〇二年／初出一九九七・一九九八年)など。
- 2 前注所掲林田論文。なお、『樂府詩集』未収の「縱橫篇」が『太平御覽』卷四百六十四に収録されており、孤例であることから張華の手による新作の可能性がある。
- 3 林田氏は注1所掲論文で「魏人の情詩が素朴な情感の流露であるのにくらべ、晋代張華のそれは、鍾嶸の評語にあるとおり、措辞が巧みで研冶になり、それだけ感情も繊細になっている」と張華の「情詩」を評する。
- 4 行については清水茂「樂府「行」の本義」(『中国詩文論叢』創文社、一九八九年)を参照されたい。
- 5 王立増「樂府詩題「行」篇の音楽含義与詩体特徵」(『文学遺産』二〇〇七年第三期)
- 6 出句「機發応弦倒」との対仗を考え、「双」を射落とされた二羽の鳥と解した。『方言』卷六に「飛鳥を双と曰う(飛鳥曰双)」とあるのによる。
- 7 劉文忠『古詩鑑賞辭典』(中国婦女出版社、一九八八年) 479～481頁。劉氏の指摘は注1所掲佐竹論文によって知った。
- 8 筆者と同様の観点に注5所掲王論文に示されている。
- 9 「長安有狭斜行」に見える兄弟夫妻をめぐる描写の祝頌性などについては大村和人「深奥の宴——梁代『長安有狭邪行』に關する一考察」(『東方学』103、二〇〇三年七月)、「巫」から「小婦」へ——樂府『三婦艶』の小婦について(『日本中国学会報』57、二〇〇五年)、「兄弟」の帰宅と私宴——樂府「相逢行」「長安有狭邪行」の「三子」をめぐる(『中国』21、二〇〇六年六月)を参照されたい。
- 10 小西昇「漢代樂府詩と遊俠の世界——南朝文学放蕩論の発生——」(『漢代樂府謝靈運詩論集』葦書房、一九八三年／初出一九六三年)
- 11 左思「詠史」其四の「朝集金張館、暮宿許史廬」に付された李善注に『漢書』卷七十七・蓋寛饒伝の「上無許史之属、下無金張之託」が引かれ、顔師古注所引の応劭注に「許伯、宣帝皇后父。史高、宣帝外家也。金、金日磾也。張、張安世也。此四家属無不聽」とある。
- 12 「遊獵篇」の夜宴の場面に「燔炙 遺芳を播き、金觴 素蟻浮かぶ(燔炙播遺芳、金觴浮素蟻)」とある。
- 13 現行『淮南子』説山訓は「瓠巴鼓瑟、而淫魚出聽」に作るが、『三国志』卷四十二・蜀書・卻正伝に付された裴松之注の本文などは「瓠巴鼓瑟、而鱗魚聽之」に作る。
- 14 注1所掲向嶋論文。

15 末聯を「但だ畏る 法を執るの吏の、礼防且つ切磋なるを」と訓み、役人の礼法や道徳に対する取締の厳しさへの畏怖が込められているとも解し得る。

16 大村和人「都」への帰還——曹植「名都篇」再考——」（『三国志研究』7、二〇一二年九月）を参照されたい。

17 訓み下しは入谷仙介『中国古典選23 古詩選（上）』（朝日文庫、一九七八年）²⁰⁰、²⁰³頁を参考にしつつ、私見を加えた。

18 諷刺の意味合いを読み取る説の代表的なものに余冠英『樂府詩選』（人民文学出版社、一九五三年）や、輕薄子に対する張華の共感を指摘するものに注1所掲林田論文がある。

19 森瀬壽三「樂府文学の特質」（立命館文学 白川静博士古稀記念中国文史論叢）⁴³⁰、⁴³²、一九八一年六月）

20 藤井守「西晋時代の樂府詩——陸機を中心として——」（『広島大学文学部紀要』36、一九七六年十二月）は張華の樂府詩

創作に関して「彼は樂府詩を通して、何かを訴えることは考えておらなかった」と指摘し、筆者も基本的に藤井氏と同じ立場

を取る。このような見解は彼の「鶴鶴賦」を思想に富んだ作品と見なすことと矛盾しない。およそ詩と賦は、同時期において全く同列に扱われるジャンルではなかったからである。なお、「鶴鶴賦」については注1所掲林田・佐竹両論文、和久希「張華

「鶴鶴賦」とその周辺——莊子、阮籍、鳥獸賦——」（『六朝學術学会報』21、二〇一二年三月）を参照されたい。

21 初兄子嚴・敦並喜譏議、而通輕俠客。援前在交趾、還書誡之曰、「……龍伯高敦厚周慎、口無貳言、謙約節儉、廉公有威。

吾愛之重之。願汝曹效之。杜季良豪俠好義、憂人之憂、樂人之樂、清濁無所失、父喪致客、數郡畢至。吾愛之重之、不願汝曹

效也。效伯高不得、猶為譚救之士。所謂刻鵠不成尚類鶩者也。效季良不得、陷為天下輕薄子。所謂画虎不成反類狗者也。

……」本稿に引用した『後漢書』の訓み下しは吉川忠夫訓注『後漢書』（岩波書店、二〇〇一―二〇〇七年）に従った。

22 按、夏陽侯瓌、本出輕薄、志在邪僻。學無經術、而妄構講舍、外招儒徒、実会姦桀。

群僚拳士者、或以頑魯応茂才、以桀逆応至孝、以貪饕應廉吏、以狡猾応方正、以諛諂直言、以輕薄応敦厚、……名実不相副、求貢不相称。

23 乃部戸曹掾史、与郷史・亭長・里正・父老・伍人、雜學長安中輕薄少年惡子、無市籍商販作務、而鮮衣凶服被鎧持刀兵者、得數百人。なお、福山泰男「曹植の「少年」（『建安文学の研究』汲古書院、二〇一二年／初出二〇〇七年）を参照されたい。

24 注20所掲藤井論文には、「輕薄篇」の末尾について「これは、この作品を現実の世界のものに見せかける為の技巧にすぎないのではないだろうか」と述べられており、リアリティの醸成に着目している。

〔附記〕本論の根幹に関わる箇所、川合康三、黒田真美子、鈴木崇義、成田健太郎、遠藤星希諸氏にご教示賜った。篤く御礼申し上げる。